

令和 5 年 6 月 6 日現在

機関番号：11601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2022

課題番号：16K16669

研究課題名（和文）戦後日本における男性同性愛者と親密な関係性に関する研究

研究課題名（英文）A Study of Male Homosexuals and Intimate Relationships in Postwar Japan

研究代表者

前川 直哉（Maekawa, Naoya）

福島大学・教育推進機構・准教授

研究者番号：20739156

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：戦後日本における雑誌記事の分析などを通じ、それぞれの時代で男性同性愛者が同性とどのような親密な関係性を取り結ぶたいと希求していたのかを調査した。男性同性愛専門誌における関係呼称としては「兄・弟」などの男性家族メタファーが多かったが、1980年代から90年代にかけて「恋人・彼氏」の語が急増すること、その背景には、男性未婚率の上昇と男性同性愛者のライフコースの変化、そして若者向け男性雑誌などが主導した「結婚と分離された恋愛を楽しむ」意識の増大があったと推測されることなどが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

男性同性愛者が同性とどのような親密な関係性を取り結ぶたいと希求してきたかの歴史の変容について、新規性および独自性のある研究成果を多角的に得ることができた。昨今、日本国内においても盛んになっている同性同士の結婚制度を求める活動の背景を考察する際にも、本研究のような実証的な歴史研究は大きな意義を有する。また「恋愛」が特権的な位置を占める現在の異性間の親密な関係性を相対化することから、異性間の親密な関係性の研究にも応用が期待できる。

研究成果の概要（英文）：Through an analysis of magazine articles in postwar Japan, I investigated what kind of intimate relationships male homosexuals wanted to form with the same sex in each era. Although male family metaphors such as "elder brother" and "younger brother" were common relationship designations in gay magazines, the term "lover/boyfriend" increased rapidly from the 1980s to the 1990s. Behind this trend seems to have been the rise in the percentage of unmarried men, changes in the life course of male homosexuals, and a growing awareness of "enjoying love separate from marriage," led by men's magazines for young people.

研究分野：ジェンダー

キーワード：同性愛 ジェンダー セクシュアリティ 親密性 BL 男性同性愛

1. 研究開始当初の背景

現代日本において男性同性愛者の多くは同性間の「恋愛」を求めているとされる。一般向けの性的マイノリティ解説書などでは、同性愛者を「恋愛対象が同性の人」と定義する例も多く、こうした価値観は男性同性愛者自身にも内面化されている。

だが同性間の親密な関係性を「恋愛」と呼び、男性同性愛者の多くが「恋愛」を求めるようになった歴史は決して長くない。1970年代の男性同性愛専門誌の文通欄では「恋人」という表現は少なく、むしろ男性家族のメタファーが用いられることが一般的であった。

戦後日本において普及し大衆化したロマンティック・ラブ・イデオロギーのもと、異性間の親密な関係性においてはセックス・恋愛・結婚の三者の結びつきが強められたと考えられている。だが同性同士の結婚制度が日本にも海外にも存在しなかった時代において、男性同性愛者が希求した同性同士の親密な関係性は、異性間のそれとは異なるものだった可能性が高い。

2. 研究の目的

本研究の目的は、戦後日本におけるいわゆる変態雑誌・会員制同人誌・男性同性愛専門誌の言説分析等を通じ、それぞれの時代で男性同性愛者が同性とどのような親密な関係性を取り結ぶたいと希求していたのかを明らかにすることである。男性同性愛者が希求する親密な関係性に関する言説を、異性愛や女性同性愛と比較した上で相互の影響を検証しながら、歴史の変容とその背景を解明していく。

3. 研究の方法

(1) 男性同性愛を大きく取り上げた戦後のいわゆる変態雑誌、会員制同人誌、男性同性愛専門誌を史料の中心とし、男性同性愛者が希求する親密な関係性に関する言説の抽出と分析を行った。読者からの投稿や「相手探し」のための文通欄、および記事内容を中心に、量的・質的の両面から調査と分析を進めた。

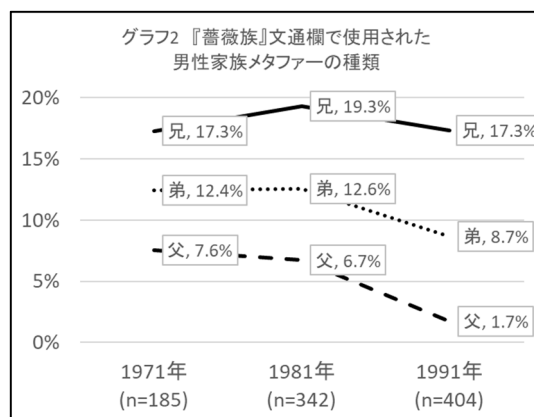
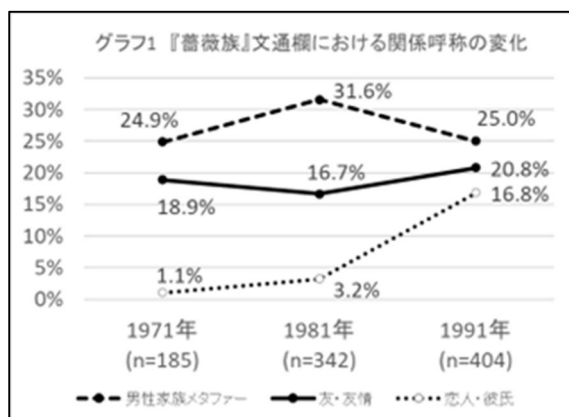
(2) 比較のための異性愛に関する史料調査・分析として、主に1980年代の若者男性向け雑誌および書籍記事の質的調査を行った。また女性同性愛に関する史料調査・分析として、女性同性愛に関連する雑誌(ミニコミ誌・商業誌)記事の質的調査を行った。

(3) 男性同性愛者とBL(ボーイズ・ラブ)の関係性について、作品およびミニコミ誌や雑誌・書籍に掲載された記事の質的調査と分析を行った。

(4) 地域の違いから捉える試みとして、東北の性的マイノリティ団体についてスタッフへのインタビューや団体概要についての調査を実施した。

4. 研究成果

(1) 1970年代から90年代までの男性同性愛専門誌の記事、読者投稿、および文通欄などを主な史料として男性同性愛の当事者である読者たちがどのような同性同士の関係性を希求していたのかについて、定量的調査および定性的調査を行った結果、男性同性愛専門誌『薔薇族』の文通欄における記述の経年比較からは、関係呼称としては「兄・弟」などの男性家族メタファーが多かったが、1980年代から90年代にかけて「恋人・彼氏」の語が急増すること(グラフ1)を明らかにした(前川 2021a)。



(2) 男性同性愛専門誌において関係呼称として使用される「兄・弟」という男性家族のメタファーには、「妻と兄・弟の両方がいる」または「兄・弟が複数いる」という状態が(少なくとも語法の上では)許される、モノガミー規範からの自由さが存在していた(前川 2021a)。なお 1971

年、81年、91年の『薔薇族』文通欄において、男性家族メタファーはどの年も高頻度で使用されていたが、後の年代になるほど「父-子」のメタファーは減少し(グラフ2)、「兄」「弟」呼称は意味合いが揺れるようになっていった(前川2017)。

(3) 男性同性愛専門誌における「恋人」呼称増加の背景には、男性未婚率の上昇と男性同性愛者のライフコースの変化、そして若者向け男性雑誌などが主導した「結婚と分離された恋愛を楽しむ」意識の増大があったと考えられる。「恋人」呼称の一般化に伴い、「友・友情」表現に恋愛的なニュアンスを伴わせる用法は減少していった(前川2017)。

(4) 1980年代の若者男性向け雑誌および書籍の定性的調査を行った結果、これらの雑誌では80年代を通じ、結婚と分離された「恋愛」を楽しむライフスタイルの提示が、消費扇動とともに行われている様子が明らかになった。具体的には、これらの雑誌において恋愛は攻略すべき一種のゲームとして描かれ、雑誌はそのゲームを攻略するための必勝法やテクニックが満載のマニュアルとしてふるまった。マニュアルとしての正当性を担保するために多数の「女の心の声」が誌面に動員された。ゲームの攻略には様々なアイテムが必須とされ、雑誌はカタログとしてこれらのアイテムを値段・ショッピングリスト付きで掲載し、読者を消費へと煽り立てた。ただし、これらの雑誌で恋愛は主要コンテンツとなったものの、結婚について言及されるケースは少なかった(前川2019a)。

(5) 女性同性愛と男性同性愛については「同性愛」の語が日本に登場した当初から非対称な関係にあることを明らかにし(前川2019b)、親密な関係をどのように希求するかについても呼称をはじめとして様々な点において違いがあることが確認された。相違点の詳細およびその背景として想定されることについては、今後さらに調査を継続し考察を深める予定である。

(6) 女性を主な読者・視聴者対象としてつくられるやおい/BLに対しては、男性同性愛者から「ゲイ男性に対する差別ではないか」などの批判や問題提起がなされることもあったが、同性愛に対する負のイメージを払拭するものとして肯定的に評価されることも少なくなく、男性同性愛専門誌に比べ入手しやすいやおい・BL作品を愛読し、影響を受けてきた層も一定数いたと考えられる。ただし男性同性愛者にとって、やおい・BLが登場人物をどのように描くかは、鑑賞者としての第三者の立場からのみではなく、時に「自分事」として捉えられた。なお、男性同性愛者にとって「愛し合う男性と、一生をともに暮らす」ことが以前に比べ現実感のあるライフコースとして想定されるようになったという変化は、男性同性愛者とBLの距離を近づけていると考えられる。2000年代以降の男性同性愛専門誌などには「BLがリアルになった」との記述がくり返し見られるようになるが、この背景にはBLが多様化し現実に近づくとともに、男性同性愛者と彼らを取りまく社会環境の側がBLで描かれてきた世界に近づいてきたこともあると推測される(前川2020、2021b)。

(7) 東北の性的マイノリティ団体についてスタッフへのインタビュー等において、性的マイノリティのライフスタイルを地域性とくに「地元」という視点から観察することの重要性が明らかになった(杉浦・前川2022)。この点については今後、さらに調査を継続する予定である。

(8) 以上のように新規性および独自性のある研究成果を多角的に得ることができた。また、研究開始当初の問いから発展し(5)(7)のように今後さらに継続することで本研究課題の射程を超える新たな成果が期待できる問いにも繋がった。2023年6月現在、日本国内においても多くの自治体でパートナーシップ認定制度が導入され、また裁判をはじめ同性同士の結婚制度を求める活動も盛んである。こうした活動の背景を考察する際にも、男性同性愛者が同性とどのような親密な関係性を取り結びたいと希求してきたかを実証的に調査する本研究のような歴史研究は大きな意義を有すると考えている。

文献

- 前川直哉 2017 「『兄貴』から『恋人』へ：戦後日本における男性同性愛者と親密性」ジェンダー史学会第14回年次大会、2017年12月17日、奈良女子大学。
- 前川直哉 2019a 「1980年代の若年男性向け雑誌における恋愛のゲーム化と消費扇動」ジェンダー史学会第16回年次大会、2019年12月8日、専修大学。
- 前川直哉 2019b 「女性同性愛と男性同性愛、非対称の百年間」菊地夏野・堀江有里・飯野由里子編『クィア・スタディーズをひらく1』晃洋書房。
- 前川直哉 2020 「ゲイ男性はBLをどう読んできたか」堀あきこ・守如子編『BLの教科書』有斐閣。
- 前川直哉 2021a 「ゲイ男性と結婚・恋愛・家族」菅野優香編『クィア・シネマ・スタディーズ』晃洋書房。
- 前川直哉 2021b 「『チェリまほ』とBLドラマの現在地」青弓社編集部編『「テレビは見ない」というけれど』青弓社。
- 杉浦郁子・前川直哉 2022 「『地方』と性的マイノリティ」青弓社。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 前川直哉	4. 巻 867
2. 論文標題 男性同性愛の歴史と雑誌メディア	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 44-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前川直哉	4. 巻 101
2. 論文標題 男性にジェンダー/セクシュアリティをどう教えるか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 季刊セクシュアリティ	6. 最初と最後の頁 22-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前川直哉	4. 巻 915号
2. 論文標題 性的マイノリティと社会、そして学校	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史地理教育	6. 最初と最後の頁 24-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前川直哉	4. 巻 417号
2. 論文標題 性の多様性について学校図書館でできること・すべきこと・してほしいこと	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学図研ニュース	6. 最初と最後の頁 8-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前川直哉	4. 巻 65号
2. 論文標題 誰もが自分らしく過ごせる社会を目指して：性的マイノリティの生きづらさを中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 心の健康	6. 最初と最後の頁 58-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前川直哉	4. 巻 40
2. 論文標題 書評 田中亜以子『男たち/女たちの恋愛:近代日本の「自己」とジェンダー』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 女性学年報	6. 最初と最後の頁 52-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前川直哉	4. 巻 31
2. 論文標題 リブライ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 解放社会学研究	6. 最初と最後の頁 155-159
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前川直哉	4. 巻 668
2. 論文標題 大正・昭和の男性同性愛者たちが語った「悩み」とその解決	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 青少年問題	6. 最初と最後の頁 18-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前川直哉	4. 巻 通巻796号
2. 論文標題 男性同性愛の戦後史研究とジェンダー	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 61-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 前川直哉
2. 発表標題 1980年代の若年男性向け雑誌における恋愛のゲーム化と消費扇動
3. 学会等名 第16回 ジェンダー史学会年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 前川直哉
2. 発表標題 男性同性愛者が文通欄で求めた交際のかたち
3. 学会等名 第33回日本解放社会学会大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 前川直哉
2. 発表標題 「兄貴」から「恋人」へ：戦後日本における男性同性愛者と親密性
3. 学会等名 第14回ジェンダー史学会年次大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 松井彰彦、塔島ひろみ、小林エリコ、西倉実季、吉野靱、加納土、ナガノハル、村山美和、田中恵美子、小川てつオ、丹羽太一、アベベ・サレシラシエ・アマレ、石川浩司、前川直哉	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ハウレーカ	5. 総ページ数 304
3. 書名 マイノリティだと思っていたらマジョリティだった件	

1. 著者名 杉浦 郁子、前川 直哉	4. 発行年 2022年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 272
3. 書名 「地方」と性的マイノリティ	

1. 著者名 青弓社編集部編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 244
3. 書名 「テレビは見ない」というけれど	

1. 著者名 小山静子・石岡学編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 六花出版	5. 総ページ数 336
3. 書名 男女共学の成立：受容の多様性とジェンダー	

1. 著者名 菅野 優香、河口 和也、長島 佐恵子、出雲 まろう、赤枝 香奈子、前川 直哉、久保 豊、井芹 真紀子、宮本 裕子、矢野 ほなみ、秋田 祥	4. 発行年 2021年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 196
3. 書名 クィア・シネマ・スタディーズ	

1. 著者名 堀あきこ・守如子編著、前川直哉ほか著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 306
3. 書名 BLの教科書	

1. 著者名 菊地夏野・堀江有里・飯野由里子 編著、朝香知己・エイミースエヨシ・風間孝・菅野優香・杉浦郁子・前川直哉・渡辺大輔 著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 274
3. 書名 クィア・スタディーズをひらく 1：アイデンティティ，コミュニティ，スペース	

1. 著者名 前川直哉	4. 発行年 2017年
2. 出版社 作品社	5. 総ページ数 234
3. 書名 男性同性愛者 の社会史 アイデンティティの受容/クローゼットへの解放	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------